学生と教員で作る文理融合リベラルアーツＦＤ公開フォーラム

文理融合リベラルアーツ科目を担当して

― 担当教員による「系列として目指すもの」―

「ことばと世界」系列

浅田 徹（人間文化創成科学研究科 文化科学系）

私は授業中に部屋を暗くするのは大嫌いですし、パワーポイントなどというソフトは持ってもいません。ですから、紙の資料でお話しします。ちなみに縦書きです。専門科目のレポートであれば、私は横書きのレポートは受理しないことにしています。そういう人間だと思ってお聞き下さい。

去年の LA フォーラムは、教員が一人一人こんな授業をやっていますという報告をするものでした。今年もそういうことをすればいいのだろうとばかり思っていましたが、蓋を開けてみると、「系列として目指すもの」というタイトルが付いておりまして、系列として何を目指しているかを言わなければいけないのだそうで、私は大変慌てました。

というのは、「ことばと世界」という系列で何かを目指すというのは、大変困難なことであって、現在のところ目指すべきものは見いだされておりません。「ジェンダー」のように、いろいろな学的領域を横断して一つの原理を立てられる概念であれば、目指すポイントは大変見つけやすいと思いますが、私どもの「ことばと世界」という系列は、残念ながらそういうふうにはできておりません。

成立の当初にさかのぼってしまいますと、本来一緒になる予定ではなかったいろいろな科目が、結局一つの系列に集合したという経緯があります。例えば私は日本文学科で、しかも王朝時代の和歌が専門ですが、そういう人間が、例えば数学や物理学の基礎講義と一緒に、あるいはコンピューターの授業と共に一つの系列をつくれというのは無理難題というものです。

私はこの系列を立ち上げるときに裏方を任されまして、みなさんどんな研究をしておられるのだろうかと、「アニュアルレポート」というもの（教員がそれぞれ自分の研究領域と業績を書いている冊子）を端から端まで読みました。しかし、数学の先生や物理の先生がおっしゃっていることは、完全に人知を絶したものとしか思われず、全く理解することができませんでした。

そうしますと、これを調停して一つの目標を定めるなどということは、私のような浅学非才の者にとっては到底不可能なことであり、どうすればいいかということで、絶望的な気分になりました。

では結局どうしたか。「ことばと世界」という系列では何でもありなのだということにしました。これほど内容の幅がばらけていて広い系列はほかにない。通常何の関係もないような科目を合わせて取るということに、一つの御利益があると考えてもいいであろうと。

実際、私も LA 演習のコマを担当しましたが、一人だけ理系の 1 年生が入って来られまして、全然自分に分からない領域なので取ってみたということでした。そういう勇敢な人を歓迎したいと思っております。

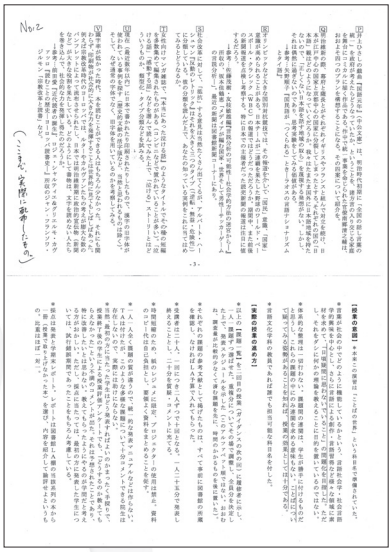
ここからは一つの例として、私の授業についてお聞きいただきたいと思います。私は先ほど申しましたように古典の和歌の専門家ですが、さすがに和歌の授業をするわけにはいきませんので、私としては最大限に頑張って、一般性を持たせた内容を演習の中身として構築してみました。

配布した資料はほぼ学生に配布したのと同内容のものです。そこに「授業の意図」が書いてありますが、「言葉が社会の中でどのように機能しているかという、言語社会学・社会言語学的興味を中心とし、さらに言語による創作・言語習得など様々な領域に素材を求めて、『日頃疑問に思わないでいること』の問題化を目指した。ただし、それをダシに何かの理論を教えることに目的を置いているのではない」というものです。さらに、「体系的な整理は一切行わない。課題間の連関は、学生が勝手に付けるものだと思うし、これらの課題の中にのみ連関を求める意味もない。ことばについて疑ってみる姿勢があることを知れば、授業の効果としては十分である」ということにいたしました。

20 人が定員だった授業ですが、22 個の課題を用意しまして、一人ずつ好きなものを選んでもらって、1 回二人ずつ発表することにしま

Copyright©2010 Ochanomizu University. All Rights Reserved.

した。この 22 個の課題は、私の浅学非才の最大限とお考え下さい。



細かく説明する時間はありませんが、教育学、異文化接触、民俗学、伝承学、詩学、比較文化学、国語史、狭山事件、社会言語学、日本語教育、ミクロ社会学、メディアリテラシー、文字史と社会学の組み合わせ、国語史、方言の社会言語学的分析、メディアの社会学、政治学、文芸批評理論、印刷史、歴史学といったものが、具体的な事象に即して問題化されるようにしました。

例えば課題の一つは、「明治維新のときに日本が、薩長と幕府とをそれぞれ中心とする二つの国家に分かれていたら、日本語はどういうものになっただろうか?」という課題ですが、東南アジアのラオスに非常にいい例があるので、それと比べてもらう形で課題化しています。また、「ヨーロッパの宗教改革の時の思想宣伝的パンフレットや、日本の明治維新期の民権思想を述べた新聞は、大きな民衆運動に結びついたが、当時の識字率は決して高くない。印刷物はどうやって民衆を動かし得たのか?」という課題は、本を読み聞かせ、耳と心で受け取っていくコミュニティの存在を浮かび上がらせるためのものですが、こういうふうに、できるだけ関係がなさそうに見える事柄を組み合わせていくことを試みました。

私の力量ですと、どうやっても理系の話までは届きません。実際に履修してきた学生のかなりの部分は、文教育学部言語文化学科の学生です。理学部の学生が一人と、生活科学部の学生が二人ぐらいおりました。ですから、やはり私の授業に理系の学生を呼び込むことは困難であったということになると思います。

これは多分、逆もそうだろうと思います。理系のコマに集まった学生は、やはり文系のパーセンテージが少なかったのではないか。先ほど、できるだけ文系の科目に理系の学生を、理系の科目に文系の学生を取らせるようにしようというアイデアをお話しになった方がいらっしゃいます。これは強制することは簡単ですが、強制すると、多分 1 年次の学習の満足度が極端に下がると思います。ということで、なかなかそういう手段は取りにくいです。何とか一つ一つの授業で間口を広げておいて、受講者にあまり制限を加えない授業にしていくことで、系列としての無節操さを幾らかでも補いたいというような形でやっております。

非常にネガティブな報告で大変申し訳ございませんでしたが、以上です。。.

Copyright@2010 Ochanomizu University. All Rights Reserved.